

飼料用米と酒粕を活用した 豚肉の低コスト生産・高付加価値化

我が国の養豚では、飼料の多くを海外からの輸入に頼り、輸入飼料価格の高騰・高止まりなどによって、その経営は厳しい状況にあります。収益力の向上を図るためには、自給飼料を活用して、飼料費の低減化により生産コストを削減するとともに特色ある生産物として高付加価値化することが重要な課題となっています。そこで、農研機構畜産研究部門、山形県農業総合研究センター畜産試験場と長野県畜産試験場では、輸入トウモロコシの一部を飼料用米（玄米）に、輸入大豆粕の一部を酒粕に代替して、自給飼料を活用した給与技術について、複数の農家で実証試験を行いましたので紹介します。

☆ 技術の概要

1. 酒粕は水分が50%以上あり、酒造メーカーごとに粗蛋白質含有量の変動が大きいこと、醸造法によって物性が異なるためにリキッド飼料（液体状の飼料）としての利用が適していました。また、メーカーによっては、酒粕からアルコールを除いた乾燥品も副産物として排出されており、この場合、配合飼料などに容易に混合することができます。
2. 酒粕は、乾物当たりの価格が大豆粕よりも安いため、大豆粕の代替として飼料費を低減することができ、完全代替する場合、不足するアミノ酸であるリジンを追加することで、大豆粕とほぼ同等の栄養価とすることができます。
3. トウモロコシや飼料用米と酒粕を組み合わせることで肥育後期豚に給与したところ、飼養成績や肉質は遜色なく、脂肪酸組成で酸化臭の原因とされるリノール酸が少なく、香りの良さに関係するとされるオレイン酸が比較的多い特徴のある豚肉が生産できました。
4. 配合飼料の90%以上を占めるトウモロコシと大豆粕を飼料用米と酒粕に代替してリキッド飼料にした場合を試算すると、飼料費を24%削減できることが期待されました。



写真1 飼料用米



写真2 酒粕



写真3 リキッド飼料

☆ 活用面での留意点

詳細については、農研機構生研支援センター「革新的技術開発・緊急展開事業（地域戦略プロジェクト）」の研究結果パンフレット（https://www.naro.go.jp/laboratory/brain/h27kakushin/chiiki_2019_result-c080-01.pdf）をご覧ください。

（農研機構 畜産研究部門 食肉用家畜研究領域 村上斉）